

## 【論文】

## 『ケータイ』から『一句頂一万句』へ

劉 静 華

## From Cell Phone to One Word Is Worth a Thousand

Jinghua LIU

## Abstract

This thesis is a continuation of my last paper on Liu Zhenyun's *One Word Is Worth a Thousand*. Focusing on the novel's intertextuality with *Cell Phone*, the thesis argues that these two novels are a series of his works that deepen Lu Xun's concept of the human spirit.

キーワード：書名、林彪、歴史性、魯迅、儒教、キリスト教、姉妹作

## はじめに

『ケータイ』と『一句頂一万句』は、長江文芸出版社からそれぞれ2003年と2009年に発行された劉震雲の作品である。この2作品はいずれも激しい世論と波紋を巻き起こし、多角的な視点から批評された。筆者もその高度な文学性に引きつけられ両作品に関する作品研究<sup>(注1)</sup>を行った。そして、その研究を進めているうちに「假話」と「真話」を織り合わせた、これらの作品は姉妹作であることに気づかされた。

「假話」をめぐる『ケータイ』の作品研究では、『一句頂一万句』は『ケータイ』の続編として解説すべきことを確言した。作者は、儒学者汪の人物造形によって『ケータイ』で開示した儒教道徳の成立の難しさを立証し、宣教師詹によってキリスト教を開示した。いわば、『ケータイ』に残された課題が語り継がれ、作者の未来を探求する模索が続けられた。こうした考察を顧みると、両作品の全貌を知る的確な方法は、その作品が互いに呼応する関連性を解明するほかにないことが明らかである。

「真話」を求める『一句頂一万句』の作品研究では、作品内部に拘泥した性格が見られるが、作品外部の諸問題については次の論考で補足すると言明する傍ら、以下の諸問題と異なった筆者の観点も明らかにした。

この本の書名が好きではない。それは林彪と毛沢東の語録を思い出させてしまい、内容とも乖

離しているからだ。もし書名と内容が一体感を持てればそれは実に完璧な作品だ<sup>(註2)</sup>。(雷達)

正確に言えば、歴史なき賤民個人の生活史が描かれている。

死の現場で生命ある者に呼びかけ、死者にひれ伏して崇めることほど、人々に畏敬の念を抱かせるものがまたあるのだろうか。<sup>(註3)</sup> (陳曉明)

しかし、これらの問題については筆者の観点を示したものの、具体的考察がまだ行われていないため、本作品についての究明もまた作品内部にとどまったままである。

本稿は、上述の観点に立って『一句頂一万句』の作品研究の補足として、本作品外部における一連の問題を考察しながら、劉震雲と魯迅の異同及び『ケータイ』と姉妹作であることを明らかにするものとする。よって、劉の文学精神は弱者を立脚点として、中国の民族精神を追求し、「我々の文化の生態」<sup>(註4)</sup>への洞察にあることが証明され、『ケータイ』と『一句頂一万句』の両作品も魯迅の思想を受け継ぐ、人間の精神のありようを探求する作品であることが理解されるに違いない。

## I、書名及び歴史性の捨象について

### (1) 『一句頂一万句』なる書名の含意

本作品の書名は、言語そのものとしては「一句が一万句に値する」という意味合いであり、かつて林彪が<sup>(註5)</sup>毛沢東を讃えた言葉として、文化大革命期には誰もが周知していた言語であった。だが、40年以上も過ぎた今、著名作家の作品名として打ち出されると、中国国内に止まらず、国外にも波紋が投げられた。

1966年初頭、《解放軍報》の「毛沢東思想の偉大なる旗をさらに高く挙げ、引き続き政治を際立たせるため、断固として五項原則のために闘う」という社説には、“毛沢東の話は、レベルが最高、威信が最高、威力が最大、一句が一万句に値する”という言葉があった。それは林彪が毛沢東を神格化にするためのものであった。(略) 作品が林彪と毛沢東とは些かも関連がないのであれば、この‘一句’は何を意味するのであろう。

劉震雲はこのように解答している。勿論、私が用いたこの言葉の意味は、林先生が用いたのと同じ、同語意不同だ。彼は政治を語り、私は生活を語っている。彼は毛沢東にお世辞を言い、(略) 私は彼ら(作中人物)に心の通う本音を言っているのだ。

作家の説明によりその非理性或いは感性の面からすれば、「打ち解けた一句は一万句の無駄話に値する」と解釈できよう<sup>(註6)</sup>。(金榮哲、韓国)

このように、書名の言語がかつて歴史的人物に使用されたものであったため、先に述べた雷達の指摘も含め、その反応は著しい。作者が何らかの隠喩を用いたのではないかと国内外の研究者に注目された。2007年に出版された『我叫劉躍進』も歴史用語を用いたため(大躍進運動の躍進)、本書と合わせてもしくは歴史的記憶を再認識させる意図があったのではないかと、といった連想に誘われやすい。しかし、孫隼為の書名についてのインタビューによると、そのような意図はないと作者は語る。

私が言っているこの言葉は、深い哲理を持つものではない。それは、ただ日常的な、暖かくて心の解け合った言語として使っただけだ。この言葉はもともと知っていたのに、慌しい歳月の中、とうの昔に忘れてしまった。突然友人に聞かされて思わず涙が込み上げた<sup>(註7)</sup>。

この釈明からすると、作者が孤独なモデル達を描く中、彼らが切実に渴望するものを発見した。それは人間同士の信頼と温もりであり、心の解け合った交流であった。つまり、林彪の「一句頂一万句」は友人に思い出させられて感無量ではあったが、自分の書名とは無関係である。しかしながら、この言語は成語でも熟語でもなく、その上慣用句でもない。作者のオリジナル言語が40年以前もの先人の使用した宣伝用政治言語と偶然に合致したとして考えるのはむしろ不自然であろう。そこで文革の隆盛期に林彪語録も臨時教材として学童期に暗唱させられた筆者の記憶が喚び起こされる。当時、作者は10才前後であるため、臨時教材を学ばされた可能性があり得る。事実作者自身も「この言葉はもともと知っていた」と語っている。とすれば、書名を設ける際に林彪の「一句頂一万句」が意識されなかったとしても、少年時にインパクトを受けたこの言語が作者のインスピレーションをはたらかせたと推察してもよからう。なぜなら、この言語の使用に当たっては、作者の意図が「暖かくて心の解け合った言語として使っただけ」であっても、文革を経験した人々には過去の記憶が思い起こされていたからである。歴史性や社会背景などの表象回避やひたすら細民の存在状況を描写する作品の内容からしても、作者がむしろ歴史を強く意識していたように思われる。故に作品の題名なる含意も、作者がかりに意図しなかったとしても、歴史に対するアンチテーゼないしその再認識を促す役割が期待できるのであろう。

なお、作品のタイトルが「一句が一万句に値する」という意味であれば、その「一句」が作品のテーマであり、そのテーマを明らかにすることこそ、作品解明にアプローチする第一歩となるのであろう。この「一句」については作品研究において詳細な考察を行った。要約すれば、主人公楊が希求する妻を感動させた高の「言葉」、牛が希求する章の「言葉」、母巧玲の「言葉」、楊の「言葉」、いずれも主人公達が求めていた「真実」であり、作品における核心となる「一句」である。むろん、「たとえ、それらのことが見つかったとしても貴方の心の苦悶は解かれないのよ」<sup>(註8)</sup>という羅安江の妻の「言葉」も作品における大切な「一句」である。この「一句」についてはⅢ章でさらに追究したい。

題名は漠然としているが、内容から逸れていないことは確かである。作品における「一句」とは、モデル達が絶えず探し求めていた「真実」の象徴であり、「一万句」も具体的な量ではなく、すべての言語を表している。主人公楊と牛は、壮大な旅による出会い、就労、見聞、多様な人間関係などを通して、人間にとって最も大切なものは、「説得上話」（分かり合えること）と気付く。しかし、数十人の登場人物において、誰一人「説得上話」の友人はいないばかりか、むしろ互いにちょっとした利害関係、或いはちょっとした気まずさで反目を繰り返していた。それが故に楊と牛は捜し求める。長い旅において、仕事を求め、人を捜し、「説得上話」の友を求め続けた。二人の旅を反芻すると、一生話してきた膨大な量の言葉よりも分かり合える「一句」の方が、価値ある言葉であり、その「一句」こそ、人間を絶望の孤独より挽回できるものである。作品の題名は歴史へのアンチテーゼを反映するとともに、このような隠喩も含意しているに違いない。

## (2) 歴史性及び人物造形

本作品は、物語の歴史性を度外視する点において、『ケータイ』と共通している。それについて陳曉明は次のように批判する。

その大歴史・元来の歴史が跡形なく消えてしまった。ただ賤民の歴史と蠅や犬のように狼狽えた賤民暮らしだけが残っている。賤民達は嘗々と自分の暮らしに執着している。自分の生活さえあれば、外のものを求めない。「説得上話」の人と「喊喪」の仕事を求める以外に望むものもない<sup>(注9)</sup>。

だが、その二つの望みこそ、私達人間の精神性を表しているのではないだろうか。「分かり合える」人を求めることは枯渇した精神を慰藉するためであり、「蠅や犬」などにはそのような営為は必要ない。

「喊喪」とは、葬儀の進行を務めることを言う。中国の伝統的な葬儀は7日間行われ、大勢の人々が集まって死者を追悼し、号泣する儀式である。「喊喪」者の采配に従いつつ、一同は白い喪服をまとい、死者の子孫とともに号泣しなければならない。主人公楊は「喊喪」者になりたい一心である。特定の事に憧れることは「狼狽えた賤民暮らし」への執着というより、生存維持の行為とは別に、自己の感情及び行動パターンへの認識と思考であり、いわゆる自我の獲得であろう。

歴史性の捨象は、作品における一方法であり、いわゆる作者が意図的に駆使した手法である。つまり、乱世の革命と角逐の描写を消去することによって、作品の物語を人間の普遍的営みとして捉えることができ、生命における本質的探求が考えられるからである。本作品は、生命の強風と荒波を表象せず、農耕時代の穏やかで自由な人間模様を描く。旅を通じて精神の漂泊を、人と人のかかわりを通して人間の屈折した心理と孤独感を表象する。そして、その困頓状態を凝視しながら、そこから乗り越えていく方法を模索した。生存を表象する点においては、黙々と働く人々の姿を人間の原風景としてデッサンするミレーの「野良の仕事」を思わせる。だが、劉の描く本作品のモデル達は、ミレーの農耕する静なる画面と違い、自然界におけるさまざまな生を営む、ダイナミックな動的画面を繰り広げていた。浮世のあらゆる虚飾をそぎ落とし、様々な生存様態を描くことによって、農耕時代における人間の原風景を再現することができた。従って、その生を営む活動と孤独な精神こそ人間の原点であると考えて、本作品の人物造形を試みたに違いない。この一連の方法はむろん、歴史へのアンチテーゼ、権勢への反動が反映されている。実際に他の作品においてもその姿勢をあらわにしている。例えば、『温故一九四二』の場合、死者多発の災地を知らぬ振りする蒋介石を次のように論難する。

かれらは終局の災難であり、成功のための生け贄である。歴史はかれらとは無縁だ。歴史は華麗な宮殿にしか存在しないのだ<sup>(注10)</sup>。

「かれら」とはむろん作者が描く細民のことである。長い間、広大な中国の辺疆の民生は、従来歴史などに黙殺されている。その生々しい生存状態はまるで未踏の氷山の一角であるかのように、人々の関心から背けられ、一部の都会人や知識人などに憐憫と同情を寄せるべき存在として見なされてきた。さすらいという高度な精神活動は、知識人の特権であるかのように思われてきた。しかし、かれ

らが決して精神世界をもち得ないわけではないと作者は言う。

私は、同郷の老若男女が豆腐屋、床屋、屠殺場、ロバ飼い、喊喪、染物屋、食堂などを営んでいるから、高度な精神活動をもっていないとは思わない。むしろそれと反対に彼らが下等の職業に従事していたからこそ、その精神活動も活発で強烈、しかも高度なものだと思う。それから知識人の概念のボーダーラインは如何に定めるべきか、何冊の本を読んだからもう知識人なのだろうか。知識人は“知”だけではなく“識”も具えるべきだ。この世界に新たな発見をもたらさなければならぬ。

多くの作家、特に中国の作家は、知識人に成り済ましている。労働者を描く際に、かれらの愚昧と無知に視点を置き、かれらの不幸を悲しみ、かれらの意気地なさに立腹する。一世継来このような状況が続き、つまり高い立場から、かれらを見下ろす姿勢でいたのだ。

精神の流浪と漂泊を描いたのは、身分に対する憤怒と反動を示す以外に、また時間に対する反動も示したいのだ。

私はこれらの知識人とは同類ではない<sup>(註11)</sup>。

長い引用となったが、上記の作者の釈明により以下の結論に導かれる。

①作者は意図的に歴史背景の描写を省略した。なぜなら歴史の記載は偉人と知識人を中心とするものであり、社会の基盤を成している細民とは無縁だからである。長い歴史のなかで彼らはこの国の「愚昧と無知」の存在として見なされていたが、むしろ「最下層の職業に従事していたからこそ、その精神活動も活発で強烈、しかも高度なもの」だと作者は思考している。

②知識人や社会全体が細民を理解しようとせず、依然として封建思想の身分制度にとらわれている。かれらを下等な生き物と見なし、かれらの存在の有りに無関心である。その不公平で非文明的な社会に異議を唱え、是正の試みを行う。

③魯迅と共通した創作魂が見られる。ともに知識人と対峙し、弱者を題材にその民族精神を探求する。魯迅の1932年の詩作「自嘲」<sup>(註12)</sup>には周知の名句があった。

皆をさいて冷遇す千の夫子、首を伏して孺子の牛とならん  
(横眉冷对千夫子，俯首甘为孺子牛)

そこには、知識人に異議を唱え、細民と共存する劉震雲の投影があった。

一連の作品における歴史性の捨象及び下層の人々の人物造形は、人間の生命の本質を追求する方法であり、作者の人間観を反映するものであった。

## Ⅱ、劉震雲と魯迅

### (1) 両者の異質性

劉の作品の根底には、常に人間の孤独感と苦悶が潜んでいる。その創作姿勢は魯迅と共通すると摩羅が指摘する。



劉震雲は、まさに魯迅のような作家であり、魯迅のような苦痛者と精神探求者だ。魯迅と同じように我々が最も常習的な、もっとも困惑するところで生活そのものの醜悪と悲惨さを見いだしてくれる作家だ<sup>(註13)</sup>。

『一句頂一万句』の主人公楊百順の人物造形は、まさに「苦痛者と精神探求者」そのものである。楊は「喊喪」の職業を求め、「説得上話」の友を求め、絶えず自己の精神を見つめていた。陳曉明は「楊百順には微かに阿Qの性質が見られる。汪は明らかに孔乙己なのだ。そして、呉香香は祥林嫂のもう一つの書き方としても考えられる」<sup>(註14)</sup>と指摘している。いわば、劉と魯迅は中国の民族精神を洞察する点のみならず、作品の人物造形においても共通点が見られる。

阿Q、孔乙己、祥林嫂とは、魯迅の作品『阿Q正伝』（1921年）、『孔乙己』（1919年）、『祝福』（1924年）の主人公であり、周知の名作である。魯迅が浮き彫りにした阿Qは、常に「まあ、いいや」と思い、あらゆる屈辱を「精神勝利法」に委ね、思考という行為を持ち得ない。孔乙己も同じである。孔は科挙試験に失敗し職も持たず、人々の嘲弄を甘受していた。知人の本を盗んだため、殴打されて足の骨折を招いた後に姿をくらます。祥林嫂は種々の虐待を受けた後、ようやく平穏な日々を手に入れたにもかかわらず、子どもがオオカミに食されてしまう。その衝撃による苦しみの果て、精神を患い人々に愚弄される、封建社会の従順な婦女として描かれる。つまり、魯迅は中国の因習的文化が培ってきた民族性を作品のモデルに託し、思考力と進取心に欠如するその民族精神を痛烈に批評していた。

しかし、楊、汪、呉は、いずれも近代思想を獲得したモデルとして表象されている。楊は常に内省し、しかも心の抛り所を捜し求め続けていた。汪は私塾で論語を教え人々に尊敬されていた。その私塾に別れを告げたのは心の病と対決し、儒教の呪縛を解き放つためであった。呉は我が子を見捨ててまでも恋仲の高と逃走し、個人の自由に固執していた。この三者は、いわゆる伝統文化の儒教思想から脱皮し、自身の「擰巴」（屈折した心理）と向き合おうとする進歩的なモデルである。この人物造形には作者の理念が託されているように見受けられる。つまり、劉は絶望した魯迅と異なった視点で、この民族の進歩と改善を模索している。

魯迅の『野草』や『呐喊』<sup>(註15)</sup>などに収められた作品のように、劉の作品も一般人の日常を描き、その民族精神の有りようの凝視に集約している。それらの作品の題材は20世紀初期、中期、ないし現在に至るが、『ケータイ』と『一句頂一万句』がその一例である。だが、魯迅と共通した時代、共通した題材を描いても一世紀に近い後の作家として、劉の場合は、魯迅の「皆をさいて冷遇す」る闘争精神、或いは自己のモデルへの絶望感などを抱かず、クールで孜孜とした叙述手法を駆使し、モデル達に自身の現実との格闘を促し、近代思想を目覚めさせる。それは創作の背景や時代的要因なども関係するが、根本的原因はやはり創作の出发点に由来するように思われる。『野草』に収められた短編『求乞者』は、魯迅が1924年に書いたもので、自身のモデルに絶望するプロットが見出される。

私はその声と態度を嫌悪する。悲しみもせず、まるで遊び半分のような態度を憎悪し、叫びながら人を追いかける行為も厭うのだ<sup>(註16)</sup>。

魯迅には、このような無力感と絶望感をあらわにする作品が多い。それは彼自身がモデル達と一緒にあって、ともに苦しみ、ともにがき、混沌とした時代とともに絶望していたからに違いない。し

かし、劉の作品には、初期から現在に至るまで、自己のモデルに絶望する光景が見当たらない。それは「創作を通して『擰巴』された理由を見つけ、それをもとに戻したい」<sup>(註17)</sup>という理念によるものと思われる。劉は、現実における困頓状態を打破し、新たな再生を思考している。彼は作品の外に立って自己のモデル達の混迷と苦悩を見極めながら、かれらを自分の理念の道へ向かわせる。楊、牛、汪のように、自滅する阿Q、孔乙己、祥林嫂と違い、かれらは自己の再生を獲得していた。即ち、劉は魯迅の思想にアプローチしながら、新たなパラダイムの形成を模索している。

## (2) 両者の同質性

上述のように、劉は弱者を題材に中国の民族精神を追求し、阿Qの本質である「対什么都不在意」(一切のことを意に介さない)という民族性を読者に目覚めさせようと試みる。そのため、楊と牛を浮き彫りにし、かれらに分かり合える友を求めさせ、心の拠り所の「一句」を追尋させた。それはまさに魯迅を継承する系譜である。

およそ一世紀もの前に、魯迅は鋭敏にこの不健全な民族性を指摘し、『阿Q正伝』を描いた。主人公阿Qは、祠に住みながら日雇いで働きぞんざいに日々をすり減らしている。自分が誰なのか、何処から来たのかも知らず、知ろうとしなかった。周囲の人々にどんなに辱められようと、彼は自分の都合の良いように心を入れ替え、己の特有の精神勝利法を押し通していた。さまざまな出来事に追いやられて革命党に逃げ場を求めるが、革命党の意味も分からぬまま騒ぎ立てたため、革命派による趙家の略奪に加担させられ、無実の疑いで銃殺されてしまう。そんな阿Qは、日々何事も意に介さず、ただうやむやに生き、しまいに死が下されても、「人間にはこの世に生まれ、おそらく殺されることも、時には免れないものだろう」(p525)と思っている。(『魯迅全集』人民文学出版社1981年)

魯迅はこの作品を通じて、生命の尊厳を持たず、生命の価値も感じ得ない当時の多くの民衆の本質を喝破し、奴隷の性質に満ちた国民性を批評した。劉は楊と牛を阿Q以後のモデルとして構想し、かれらに自我の覚醒、精神の帰趨を求める旅に向かわせた。その旅の中、二人は精神の空虚と人間の難しさによる孤独を経験するが、この孤独の解決に当たって、劉はまた汪と詹、つまり儒教とキリスト教を提示した。しかし、かれらは阿Qと同様にそのことを意に介さなかった。この問題について作者は次のように指摘している。

楊百順は『論語』と『聖書』を学んだ。恐ろしいことに楊は私達多くの人間と同様に一つの世界の解釈を意に介さないだけでなく、二つの世界の解釈にもすべて意に介さないのだ。

中国人は多い。集まれば勢い猛だが、単独でいると孤独である。宗教を抜きに生存の面から見ても、これが我々の文化の生態なのだ<sup>(註18)</sup>。

このように、作者は汪と詹を表象した意図を吐露し、魯迅に共感した国民の精神性に喪失感を抱く。いわば、劉は逸早くこのような民族「生態」を凝視した魯迅と重なり合い、阿Q以後の民族精神の探求を試みたのである。

劉の魯迅思想の受容については、楊を表象する以前、『ケータイ』の主人公厳を通じてすでに言明していた。

本来は費先生に視聴者の生き方を指導して頂きたいのだが、彼ら自身はちっとも気にならないとは思ってもよらなかった。国民の資質はこんなもんだな。魯迅も当時匙を投げたのだから<sup>(注19)</sup>。

蔽のこの独白は、魯迅が看破した国民精神を痛感する作者の思いが込められ、その思想への共鳴が窺える。さらに、楊と牛の求めた「一句」が獲得できなかったこと、牛が楊の旅を繰り返したことも付け加えると、作者もかつての魯迅と同様に、混沌とした現実への打開策が見つからず、阿Qが代表するこの民族の精神性に苦悩していたことが明らかである。そのため、牛の旅はこの先も繰り返していくほかはない。なぜなら、その「一句」を捜し求めるほか、作者は人々に新たな指標をまた提示できないからである。

### Ⅲ、『一句頂一万句』から『ケータイ』へ

『一句頂一万句』は『ケータイ』の続編として解説すべきことを前述した。また、作者は儒学者汪の人物造形によって『ケータイ』で開示した儒教道徳の成立の難しさを立証し、宣教師詹を登場させ、キリスト教を開示した。いわば、『ケータイ』に残された課題が語り継がれ、作者の未来を探求する模索が続けられたと序論で述べた。以下、〈假話〉と〈真話〉、儒教とキリスト教の表象、作品の構図などをめぐって、両作品が姉妹作であることを明らかにする。

#### (1) 「假話」と「真話」

『一句頂一万句』と『ケータイ』は、一見ヴァーナキュラー（土着主義）とアーバニズムであるかのように、対極的作品に見受けられるが、実際のところ、『ケータイ』の終章が『一句頂一万句』の序章と考えられる。従って、両作品が姉妹篇であることを確信した。この観点について作者から以下のような回答が得られた。

『ケータイ』と『一句頂一万句』の関連性については、まだ論じる者はいない。これはあなたが提起した視点の智慧と価値だ。私自身はただ『ケータイ』の3章の書き方は『一句頂一万句』の始まりと思っている<sup>(注20)</sup>。

『ケータイ』の終章の書き方が『一句頂一万句』の序章と共通していれば、前書で掘り下げられなかったテーマを引き続き語り継ごうということとなるのであろう。両作品は各々「假話」（虚言）と「真話」（真実の話）を軸に物語を展開している。「假話」を語る『ケータイ』の主人公嚴守一、「真話」を求め続ける『一句頂一万句』の主人公楊と牛は、いずれも人間の精神の有りようを追究している。

『ケータイ』では、携帯電話の媒介した「假話」（虚言）が、組織化されたウイルスのように人間のメンタリティーを疾病化してしまい、深刻な社会問題を引き起こしたことを表象し、困頓としたその社会現状を打破すべき暗示として、儒教道徳が提唱された。北京のテレビ局でトーク番組の司会を務める蔽は、大学教授費の企画参与によって視聴者に儒教道徳を唱えていた。しかし、虚言を言うかれら自身がその道徳に背反し、「假話」の世界を築いてしまい、やがて破滅を迎える。



巖と費の「假話」は家庭環境で顕著に見られるが、その原因を追求すると、かれらは妻たちと互いに分かり合えないことが浮かび上がる。以下、二人の家庭内の様子である。

巖の場合：

今、貴方の話を聞くのは、テレビのものだけですわ。

妻子の話を知ると、巖ははっとしたが、その後の二人の会話を考えると、いっそう緊張してしまう。幸いに二人ともそれに慣れてしまい、妻子もあまり追究しなかった。もっとも際立つのは食事の時であった。二人が囲んだ食卓は食べはじめてから終わるまでのお椀とお箸の音しかないのだ。(《手札》34頁)

費の場合：

貴方は一日中私と話さないから、ほかの人と話してもだめだというの？私を窒息死させるおつもりなの？(《手札》55頁)

このように、巖と費は分かり合える家庭を築けなかった。かれらの「假話」は分かり合える人を求めるためだと断言できないにしても、そのような期待を願う側面が窺える。孤独に耐えきれず、「真話」との邂逅を求めて愛人を設け、妻達に「假話」を言わざるを得なかった。

一方、『一句頂一万句』では、楊が辺鄙な山村で父親との確執によって放浪の旅に出て、職、人、「真話」を捜し求めてゆく。楊は人と人の関わりを通じて、さまざまな仕事を通して、人間というもの難しさを経験し、絶望的な孤独を体得した。作者はそんな楊に儒学者汪と宣教師詹を邂逅させ、精神の帰趨を目覚めさせたが、前述のように彼はそれを意に介することはなかった。後に楊の孫の牛も外祖父と同じ人生を繰り返す。

主人公楊と牛が求めた「真話」は、広義にわたって表象されている。高が呉に捧げた言葉、章が牛に伝えようとする言葉、死者巧玲と楊の言葉など、いずれも二人の知りたい真実を表わす「真話」である。楊と牛は妻達と分かり合えないため、妻達は自分と分かり合える人と逃走した。彼女達を捜す旅のなか、楊と牛は心の憂悶を解くには、その「真話」を知る必要があると目覚める。だが、二人の旅はその「真話」が分からないまま幕を閉じた。

「假話」と「真話」の発生原理は、いずれも人間の孤独感に由来する。『ケータイ』の作品研究で明らかにしたように、主人公たちは孤独であり、「假話」の背後の人間同士の分かり合える交流を渴望していた。「假話」のメカニズムは、社会的病理と人間の孤独感という二重要因から生じたものと解析したのに対し、『一句頂一万句』の作品研究では、楊が旅を通して求め続けていた「真実」とは、人と人の心の奥底で分かり合える交流である。しかし、楊の幾度の改名、楊百順から、楊摩西、呉摩西、羅長礼までの旅は、その「交流」までに到達できずに崩壊した。その原因は楊の旅を振り返れば明瞭である。曾との師弟関係、呉との夫婦関係、尤との知人関係、それから道中で出会った多くの人々、かれら一同は常に反目、背信、欺瞞の中で彷徨い続けていた。彼らは自身達の精神の歪みを意識することもなく、各々救いようのない孤独のなかで悶えていたと解された。いわば、両作品はともに「假話」と「真話」を通して、人間が孤独を甘受できず、「分かり合える交流」を希求していたことが語られていた。

## (2) 儒学からキリスト教へ

『ケータイ』では、巖と費の人物造形において、儒学による数十億の視聴者の救済は実現できないことが示されている。その暗示は両者が儒教思想の信奉者でありながらその道徳に背反した描写から読み取れる。それは作者が儒学と現代社会の齟齬を洞察したからに違いない。

作品中、費を孔子に仕立てることによって、儒教思想を番組に取り入れ、視聴者の資質の向上を図ろうとしたが、国民が自身の資質を「気にしていない」どころか、提唱者の巖と費も前述のようにその規範と倫理に背馳していた。この時、未来の開拓は両者の「假話」行為によって成立が不能となる。また、良き理解者である祖母が死去することで、主人公巖が更なる孤独に陥り、未来を模索する道は閉ざされる。そのため、作品は主人公の破滅のまま終結を迎え、人々に困頓状態を乗り越える指標を示すに至らなかった。となれば、当然ながら『ケータイ』のテーマの表象も未完のまま終わった。しかし、この作品が未来を模索するものであれば、このテーマの完成も引き続き構想されるに違いない。実際に、この模索については、本作品のインタビューを受けた際に、作者はすでに触れていた。

おそらく真実のものは、私はまだ見つけていない。だが、その真実のある場所は知っている。ゆっくり近づきたいのだ。その真実とは、きっと私が感じるこの世界の感覚だ。それは新しい発見だ。その真実がおそらく人の心にもっとも即し、その上本質的だ。しかし、いつ、それが見つかるかは分からない。だが、求め続けるつもりだ<sup>(註21)</sup>。

その後、作者が求め続けた結果、あるいは作者の「感じるこの世界の感覚」の現われとして、『一句頂一万句』が誕生したのだ。本作品において作者は引き続き儒学と向き合い、『論語』を教える汪を浮き彫りにした。このモデルを通じて、儒教道徳の諸問題を具体的に反映させた。汪は、君臣、父子、夫婦の道や、仁、義、礼、智、信などの五常に囚われていたが、自己の絶望感と格闘した末、彼はついに儒教の呪縛を解き放ち、自身の再構築を求めて、旅職人を選択した。つまり、作者は巖と費に続き汪を表象し、『ケータイ』で開示した道徳理念の成立が困難であることを示した。さらに汪が忘れられない人のために悶えたあげく、儒学と決別した描写から、儒教道徳が現代社会に即応せず、むしろ乖離していたことを示唆しているように見受けられる。

作品中、儒学者汪の次、宣教師詹の登場が設定され、いわば、新たな模索として、人々にキリスト教を開示したのである。しかし、詹の50年間にも及ぶ宣教活動は8人の信者しか獲得できず、しかも彼らは詹を信じるが、キリストを信じていない。後に詹の死去が加わると、この試みも成功せず、人々を孤独から救済するのは不可能ということになる。即ち、人々の心に「もっとも即し、その上本質的」なものとは、楊と牛の漂泊の旅のように、永遠に真実の「一句」を捜し求めるほかにないのである。

## (3) 両作品における構図なる寓意

『ケータイ』の構図は、三つの時空設定により見られるのに対し、『一句頂一万句』は主人公楊と牛の旅により表象されている。前書は3章より構成され、1章が主人公の童年、2章が主人公の中年、3章が主人公の祖父母、といった三つの時空及び三つの生存形態が語られている。そして、主人公巖一族の原点を3章に設定したことで、主人公の歴史、現在、歴史の原点というように繋ぎ合わせるができる。この時、作品は「○」のような大時空を形成し、過去—現在—過去の過去といった構図

が浮き上がってくる。それに対し、『一句頂一万句』では、上下2部の構成において、上の主人公楊と下の主人公牛が、故郷を離れ、故郷に舞い戻るといった二つの時空より示されている。つまり、故郷延津を舞台に、楊と養女巧玲と外孫牛の旅が繰り広げられたが、楊の延津脱出と牛の延津帰還が接点を結び、二人は出奔から帰還への旅を完成した。この時、楊と牛の持つそれぞれの時空が一つに繋げられ、作品の構図として浮かび上がる。こうした両作品を顧みると、ともに「○」の構図を持ち、ともに一世紀の年月の中で彷徨い続けた、3代の人を描いたことが明らかである。では、この構図は何を意図しているのであろうか。

『ケータイ』の作品研究において、「○」の構図には、作者の過去をさかのぼり、現在を凝視し、未来を模索する世界観が明示されているが、主人公厳をはじめ、一連の探求結果では、魯迅と共通した喪失感を抱くほかはなかったと述べた。つまり、一世紀という年月を通して、「現在」まで彷徨い続けている人々を凝視し、その困頓状態の開閉策を模索したが、方策は見出せなかった。時は「○」のように絶えず繰り返されてゆき、人類の生存形態も絶えず変化を遂げたが、国民の資質は改善されず厳と費が転落したように、人々は依然として「魯迅が匙を投げた」状態に停滞している。この結論と同様に『一句頂一万句』の構図もこのような寓意が込められている。この観点は、楊と牛の一世紀に渡る旅及び二人の重ねた人生から窺える。両者は血縁関係がないのにもかかわらず、妻を捜す旅、「言葉」を捜す旅、捜すことを断念し、新たな始まりを決意することなど、いずれも複写したかのようであった。それはまさしく両者、或いはこの国の人々が長い間、同じことを繰り返している、ということではあるまいか。

一方、作者はこのような現実を認識しながらも、今日の社会における新たなパラダイムを模索している。それは汪と魯、いわゆる『論語』と『聖書』を提示したことや厳が作品中で絶えず叫び続けたことなどから、その姿勢が窺える。

この国のすべての人を代表して言う。われらはこれ以上こんなうやむやに生きてはならんのだ<sup>(註22)</sup>。

このように、一世紀の年月において、厳が自省したように、また、楊と牛が繰り返した旅のように、人々は「うやむや」にその伝統文化を繰り返したのであり、阿Qの二の舞を演じていたのだが、これからの牛の旅、或いはその後が続く人々の旅が、如何にしてなされてゆくべきかの覚醒が求められている。厳と費の挫折を繰り返さず、楊と牛のように自己省察しながら、真実の「一句」を求めなければならない。「○」の構図は、過去への自省及び「現在を見れば過去を知ることができ、過去を知れば、未来も知るはずだ」<sup>(註23)</sup>といった、作者の未来を志向する世界観が反映されている。

『一句頂一万句』は、『ケータイ』で語られたテーマを完成させたと同時に、作品の構図における新たなテーマも暗示している。それはI章で触れた楊の孫、羅安江の妻の独白なる含意である。「たとえ、その『言葉』が分かったとしても、貴方の心の苦悶は解かれないのよ」という「一句」は、楊と牛が求めていた「真実」より、さらに深遠なる「一句」である。この「一句」こそ、人間の究極を突き止め、人類の孤独そのものを語っている。いわば、人間は精神の帰趨に期待を持ちつつも、やがてその期待に絶望し、永遠に孤独から逃れないのだ。我々は「○」の構図における世界流転とともに、人類の孤独と対峙するほかにないのである。

## おわりに

上記の考察からすると、『ケータイ』と『一句頂一万句』が姉妹作であることは疑う余地がない。両作品は「假話」と「真話」をめぐって、絶えず繰り返されてゆく人間の生命体を凝視しながら、その精神の帰趨問題を探求した。作者は魯迅の批評精神を継承し、今日の社会における新たなパラダイムを模索した。『ケータイ』では、儒教思想による人々への救済を試みたが、実現できず敵をはじめ一同は敗北を辿った。『一句頂一万句』では、儒教とキリスト教とを合わせて、人々への救済を試みたが、むろんいずれも成功しなかった。だが、孤独を甘受できず、分り合える「真実」を求め続けていた楊と牛のように、作者は引き続き、この民族の「生態」を凝視しながら、絶えず流転するこの世界とともに人類の孤独と対峙し、更なる「一句」を求めていくのであろう。

## 【注】

- 1) ①『ケータイ』の構図における寓意を求めて  
——「擰巴」と「假話」をめぐって——  
(投稿中)
- ②「真実」追尋としての旅及びその永遠性  
——劉震雲の『一句頂一万句』を読む——  
(投稿中)
- 2) 雷達「这是一本奇书」<http://book.sina.com.cn>  
2009年06月03日 新浪读书  
我不喜欢这本书的书名，它让我想起林彪和红宝书，这本书的书名和内容是不一致的，如果保留一致感就更完美了。
- 3) 陈晓明「“喊丧”与当代乡土叙事的幸存经验—刘震云《一句顶一万句》的“去历史化”意义」《文汇报》2009年8月16日  
准确地说，是无历史的贱民个人的生活史。  
在死亡的现场，唤来其他存活的生命向死者顶礼膜拜，还有什么比这样的存在更为令人敬畏的呢？
- 4) 「刘震云：一万句顶一句」《北京晚报》2009年3月16日  
杨百顺跟私塾老师学过《论语》，也听老詹讲过《圣经》。可怕的是，杨百顺像我们许多人一样，他不是对一种世界的解释不在乎，他对两种解释都不以为意。  
中国人很多，聚在一起人多势众，但分开的时候，个个又显得很孤单。不从宗教的意义上，单从生活的层面说，这就是我们的文化生态。
- 5) 林彪 1907、12、5～1971、9、13。中国共产党中央委员会副主席、中国共产党中央军事委员会第一副主席などを歴任。1971年、12日、毛沢東暗殺に失敗し、ソビエト連邦へ亡命。翌13日の深夜に林彪や林立果、葉群、パイロット、整備士ら計9名を乗せたトライデント機は山海関空軍基地を強行離陸し、モンゴル人民共和国のヘンティエー県イデルメグ村付近に不時着陸を行おうとして失敗し、9人全員が墜落死した。
- 6) 「《一句頂一万句》初探」 韓国外語大学国際學術討論會論文集23～24頁 2010、11、18  
1966年初《解放军报》发表社论〈更高地举起毛泽东思想伟大红旗，为继续突出政治坚决执行五项原则而斗争〉，其中，“毛主席的话，水平最高，威信最高，威力最大，一句顶一万句”的句子是林彪神话

毛泽东的话。(略)既然这部作品与林彪和毛泽东毫无瓜葛,那么这‘一句’意指什么呢?

刘震云是这样回答的:(略)当然,我说这句话,跟林先生也是话同义不同,他指的是政治,我指的是生活。他说的是句恭维话,为了恭维毛主席(略)我对他们(书中人物)说的:是一句知心话(略)。

根据作家的说明,再非理性或感性的层面上可将书名释为“一句知心话抵得上一万句废话”。

7) 同(注4)

我现在说的这句顶一万句的话,并不是一句深刻的哲理,而是朋友间一句家常的话,一句温暖和知心的话。这话本来知道,无非世事繁杂,忘记的时间太久了。突然听朋友说起,不禁泪流满面。

8) 作品の紹介、引用などは、長江文芸出版社2009年に発行した第一版のものによる。筆者訳。以下頁と原文を記す。

就是找到这些事,也解决不了你心里的烦闷。353頁

9) 同(注3)

那个大历史/元历史消逝得不见踪影,只有贱民的历史,蝇营狗苟,过着贱民自己的生活,贱民始终过着自己的生活,有自己的生活,不要别的,只要能有一个说话的人,只要做一个“喊丧”的人。

10) 江苏文艺出版社1995年

他们是最终的灾难和成功的承受者和付出者。但历史历来与他们无缘,历史只漫步在富丽堂皇的大厅。303頁

11) 同(注4)

我不认为我这些父老乡亲,仅仅因为卖豆腐,剃头,杀猪,贩驴,喊丧,染布和开饭铺,就没有高级的精神活动。恰恰相反,正因为他们从事的职业活动特别“低等”,他们的精神活动就越是活跃和剧烈,也更加高级。还有,“知识分子”的概念如何界定?读了几本书,就成了“知识分子”?“知识分子”不但要“知”,还得有“识”,得对这个世界有新的发现。

因为许多作家,特别是中国作家,也假装是“知识分子”,他们一写到劳动大众,主要是写他们的愚昧和无知,“哀其不幸,怒其不争”,百十来年没变过。采取的姿态是俯视。

表达这种精神的流浪和漂泊,我除了要“愤怒”和“反动”一下“身份”,还想“反动”一下“时间”。我跟这些“知识分子”,不是一类人。

12) 鲁迅全集 第7卷174頁 人民文学出版社1982

13) 摩羅「耻辱者手记——一个民间思想者的生命体验」《摩罗文集》華東師範大学出版社、2009

刘震云正是一位鲁迅式的作家,一位鲁迅式的痛苦者和精神探索者。象鲁迅一样,他在我们最习以为常、最迷妄不疑的地方,看出了生活的恶恶和悲惨。

14) 同(注3)

杨百顺身上可以隐约可见阿Q的精神气质;老汪则不折不扣是另一个孔乙己;而吴香香也不妨看成是对祥林嫂的另一种改写。

15) 鲁迅全集《野草》第2卷、《呐喊》第1卷、人民文学出版社1982

16) 「求起者」『野草』鲁迅全集第2卷167頁、人民文学出版社1982

我厌恶他的声调,态度。我憎恶他并不悲哀,近于儿戏;我厌烦他这追着哀呼。

17) 「杨澜访谈录」凤凰电视台2007、12、12

是我拧巴还是这个世界拧巴?我肯定觉得这个世界拧巴了,但是的话,当世界把我拧巴到一定程度的时候,我倒想试图通过写作,把拧巴的理儿再拧巴回来。至于我拧巴回来的理儿是不是另一种拧巴,我觉得那是另外一回事。

18) 同(注4)

中国人很多,聚在一起人多势众,但分开的时候,个个又显得很孤单。不从宗教的意义上,单从生活



的层面说，这就是我们的文化生态。

19) 《手机》28頁

你是孔子，我是戏子／本来想让费老教导他们如何生活，没想到他们自己倒不在意。民族的素质就这样，鲁迅当年都无药可救。

20) 2011年2月16日、筆者への書簡

《手机》和《一句顶一万句》的关联，还没有人这么论述过。这是您提出这个角度的智慧和价值。我个人只是觉得《手机》第三部分的写法，是《一句顶一万句》的源头。

21) 「刘震云谈《手机》拧巴的世界变坦了的心」北京青年报2003年12月9日

可能最好的东西在哪儿、我还没找到。但我知道它在哪儿，我可以慢慢地去接近它。我知道它肯定是，就是我对世界的这个感觉，它是一个新的发现。它可能更跟人贴心贴肺，也可能更本质。但我不知道我什么时候能找着。但我会一直找。

22) 《手机》26頁 長江文芸出版社 2003年

嚴守一：我代表天下的苍生，再不能让我们这样不明不白地活着了！

23) 同（注21）

看现在就可以知道过去，看过去就可以知道未来。